

講 演

## 児童思春期と家庭のメンタルヘルス

太田秀造

札幌太田病院長

児童思春期症例に対しては、その子だけでなくその子の家庭全体を支援の対象とする必要がある。それらの家庭の多くはひとり親家庭であり、たとえ両親が揃っていてもうまく機能していない「機能不全家庭」であることがふつうである。しかもその機能していない父親と母親とは、自分たちが機能していないことを自覚していない。彼らが機能していないのは「悪意」や「怠慢」によるのではなく、反対に彼らなりにせいっぱいやっているのである。

多くの場合、両親自身がおのおの「機能不全家庭」出身であり、自分たちの親がふるまったように、いまや親になった自分たちもふるまってしまうのである。そして親自身が自分の過去のつらさから楽になっていないのがふつうである。つまり、児童思春期症例は「その子の問題」ではなく「その家庭に代々引き継がれた悩みの、一つの表現」ととらえたほうが理解しやすい。そうとらえることで、児童思春期症例の治療にはその両親を含む家庭全体（少なくともその子の祖父母の代までさかのぼることが望ましい）に対する援助が欠かせないことがはっきりわかるのである。

明らかに「機能不全家庭」と分かる場合も多いが、家庭に問題がないようにみえる場合もある。しかし、この世に完璧な人がいないように、どの家庭も完璧ではありえない。問題点を探すつもりになればどのような家庭にも大なり小なり問題点は必ずある。子どもは未熟なので当然完璧ではないが、どんなに立派な両親であっても、完璧な父親、完璧な母親、完璧な夫婦ではありえないのだから、反省すべき点、お詫びすべき点がある。一方、地球に生命が誕生してから先祖代々無数の生命をつないで現在まで生きのびてきた結果存在するその家庭は、それだけで十分すばらしく、お互いに褒める点が無数にあるはずである。いいかえればその家庭は、悩みはあるものの「完璧ではない」というだけで「ほとんど完璧に近い」ということもできるのである。

家庭に「子の問題」で悩みごとが生じた場合、これまでの自分たちの家庭の歴史を振り返る好機として肯定的にとらえてよいのである。この機会に、父親、母親、子、その他家庭の全員それぞれが、生まれてから現在までの自分の言動を詳しく調べて内省し（内観療法）、お互いにお詫びし、お礼を言い、褒めあう（家族内観）ことから家庭の機能は回復し、子は安心して元気に成長していくことができるようになる。

当日は事例を提示して実際の対応を説明する。